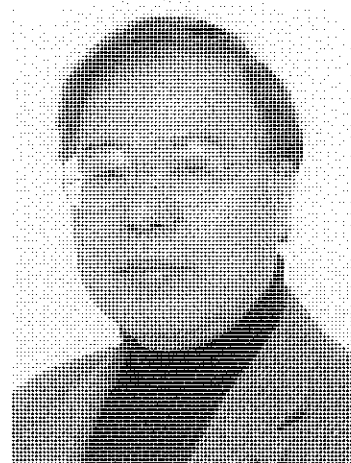


| 四国はおもしろい |

作家
荒俣 宏

慶應義塾大学卒業後、10年間システムエンジニアとして日魯漁業（現・ニチロ）に勤務した後独立。百科事典の編集助手をしながら書いた小説「帝都物語」がベストセラーになり、同作品で日本SF大賞を受賞。神秘学、博物学、風水等、多分野にわたり精力的に執筆活動が続ける。

プロフィール

● 職歴・経歴

1947年 東京都生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。

中学2年の頃、幻想文学の紹介者平井呈一氏を知り、手紙を書く。

以後、平井氏が亡くなるまで交際が続く。また、博学の師と仰ぐ紀田順一郎氏を知る。高校時代は幻想文学や英米の文学書を読みふける。日本大学経済学部と慶應大学法学部に合格、慶應大学に入学。

大学時代、教養課程ドイツ語の教師、高橋巖氏に出会い神智学を知る。

大学卒業後、日魯漁業に就職、北海道拓殖銀行のコンピューター室に出向。当時の最先端の機械でプログラマーやSEとしてサラリーマン生活を続けながら、幻想文学の翻訳を続ける。

79年 同社を退社し、フリーの翻訳家となる。

80年 平凡社「大百科事典」の編集助手となり、84年 初の小説「帝都物語」の執筆を始める。

また「世界大博物図鑑」でサントリー学芸賞を受賞。博物学者の長谷川仁氏を現在の師と仰ぐ。

TBS「朝ズバッ!」フジテレビ「ベストハウス123」等にレギュラー出演。

● 著書

「新帝都物語」、「アラマタ大事典」、「磯魚ワンダー図鑑」、「世界大博物図鑑」等、著書は300冊を超える。

四国はおもしろい

作家 荒俣 宏

おはようございます。

今日はお呼びいただきたいへん感謝をしております。荒俣と申します。90分ほど私なりに四国との関わり合いと四国の面白さを皆さんにお話したいと思っています。

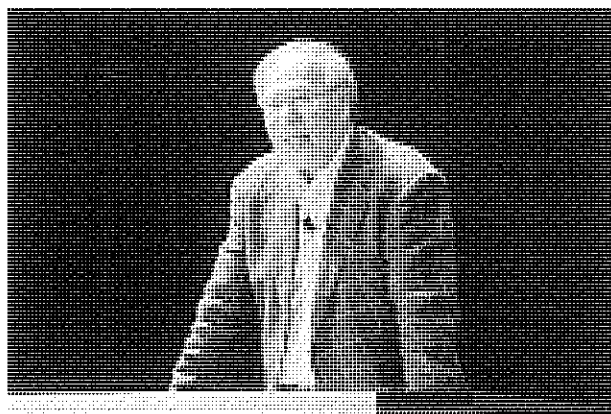
題して「四国は面白い」何が面白いのか、これから少しずつお話をしていきます。

始めにここは徳島なんで。私も縁あって何度かこちらへ伺ったことがありますので、そのお話からちょっとさせていただきます。

昔、私が初めてテレビに出た時にどうしても作りたい番組がありました。それが二十数年前に作った番組で、実はこの蜂須賀家の最後のお殿様でしょうおそらく。そう呼ばれた鳥を研究していた冒険家であり、世の中では無鉄砲な何をやるかわからない貴族だと言われていた蜂須賀正氏さんのことをテレビ番組にいたしました。確かあれは2時間番組くらいの非常に長い番組を作ったんですけれども、これが最初でまさにテレビの仕事をしたスタートになったんですね。

蜂須賀^{まさうじ}正氏さんと言えば今の方々はあまりご存知ないかもしれませんが、年中新聞ネタになった有名な人でありました。

私がテレビ番組を作った時に、その蜂須賀さんが好んで住んでいた神奈川の熱海という所に別荘があったんです。この別荘におそらく当時、日本で初めてだろうと思われるジャングル風呂などがあったんですね。そのジャングル風呂を見物に行こうと思ってテレビ番組を作って行ったら、今でも覚えております、とうとう工事が始まっていました。蜂須賀さんがもう亡くなってしまっていたので。それでテレビの人たちと映像を撮ろうと思いましたが無くなっておりまして、驚いて工事をやっている人に「何で無くなっちゃったの?」って言ったら、いや昨日から工事が始まりました。あの蜂須賀さんが好



んで住んでいた邸宅は昨日取り壊しましたと言われて非常にびっくりしたので三田綱町にある、東京の三田にあるオーストラリア大使館だったかな、当時。掛け合いまして、本邸の方の取材をさせていただきました。そうやってテレビ番組を作った記憶がありました。そして、こちらの方にもちょっと寄せていただき、蜂須賀さんの足跡などを検討したそういう記憶がございます。

その徳島でお話をする以上は、当然このサブタイトルにある通り、四国っていうのは奇人と偉人の特産地だっていうことですね。他の地域でなかなかこんなにスケールの大きい奇人にしても偉人にしてもなかなかいなかったんじゃないかと思います。それはおそらく、4県それぞれ四国という特性を活かしてですね、産業やあるいは文化に独特の知恵を絞ったせいだと思うんです。

ここ数年、坂本龍馬ばかりなんですけれども、龍馬だけじゃなくて、もっともっと四国は面白い人物が沢山いたってことをちょっとお話できればと思っています。

では、スライドを見ながらお話をスタートさせていただきます。

今日のお話の発端は先ほど申し上げました通り、四国って何でこんなに凄い人がいるんだろうかということが、私は東京の人間でありますから地元の方

はイメージが全く違うかもしれませんが、どうしてこう興味深い人物がいるんだろうということがスタートになっています。4県を見てもですね、ちょっとここに名前を挙げました。この名前の方はこれからゆっくりお話をいたしますけれども不思議な人が多いんですよ。

まず、私高知では牧野植物園というのが五台山の所にありますが、あれが再建されて素晴らしい庭園になった時にちょっとお手伝いをさせていただいたことがありました。その時沢山の牧野さんの書いたものや集めたものを拝見して、やっぱりこの人普通じゃないなと思ったことがありました。

ちょっと次を見せてください。

牧野富太郎、有名な植物学者です。この人何が凄いかと言うと自分にキャッチフレーズ付けてるんですよ。なかなか植物学者で自分にキャッチフレーズ付ける人っていないんですが、『植物と心中する男』とか『植物の愛人』だとか『植物と暮らして50年』とかっていう自分へのキャッチフレーズを付けた非常にユニークな人物で、この辺ちょっと土佐的なのかどうか分かりませんが、広大な自分を売り込むスタイルというのは牧野さん独特だと思うんです。でも牧野さんのいろんな資料を見て、皆さん牧野富太郎どういうイメージかおそらく個々の方が持ってらっしゃると思いますが、私が一番気に入ったのはこの人写真を撮るといつも笑ってるってことです。今の牧野植物園の所にも大きなこのお顔が出ておりますね。で、これだけじゃないんです。牧野さんの笑っている写真で沢山あります。

次をみせてください。

いい顔で左の写真なんかいい顔で笑っていますよね。だいたい日本人で笑い下手なんです。日本にきた小泉八雲っていうのは日本人は笑わない。何か笑ってんだか泣いてんだかよく分からない。非常に曖昧な表情をする。でいくら怒っても「すみません」とは言うんだけどその表情が全く変わらない。私の言うことを聞いてないのかなと思ったら翌日切腹していたっていうんで驚いたことがあったっていうく

らいなんですね。それくらい表情を出さない。ま、あのこれは無理もないんで、昔の写真で写真撮って露光するまで相当時間がかかるんですよ。下手すると数分かかるので、可愛い顔してそのまま数分いるのはかなりキツイんです。坂本龍馬も笑ってないですよ。同じ植物学者でいつも牧野さんとライバルだと言われていた南方熊楠なんか目をむいて、こういう顔して必ず写真に写ってます。でもそういう写真の中で牧野さんだけです。右側の上なんか見てください。木の股の間だから妖怪のような顔であーっていつて出てきてます。その下にいたっては凄いですよ。あの巨大なキノコを持って頬被りをして踊りを踊っています。キノコ踊りっていうのを。これは青森の、どこだったかな恐山で採集している時に戯れに撮った写真らしいんですけども、こんなバカな写真撮る人ってたぶん明治から大正、昭和の初期にかけては、そんなにはいなかったと思います。だから日本でもそうですが「笑って、チーズ」とか言ったりしますよね。今でも写真撮る時。あのルーツ実はこれなんです。日本人が笑わないので海外の写真屋が横浜とか函館に写真店を開いた時に、日本人の写真を撮ろうとしたら全然笑わないんで、しょうがないので色んな戯けやったりギャグ言ったりしてようやく笑わせたというのがいまだにずっと続いているんですよ。だから記念写真にチーズなんて言って。

大正時代に一人の人物が、銀行をやっていたおじさんですが牧野元次郎。この人も牧野っていう名前なんですが、この人が日本人があまりに笑わないので皆で笑って世の中を明るくしようっていう運動を起こしました。通称ニコニコ運動っていうのを起こしたんですね。そしてニコニコっていう雑誌を出しました。それで色んな有名人を馬鹿笑っている写真を撮って、毎号皆に売り出したっていう。ニコニコっていう大笑い写真雑誌を作ったんです。色んな人に笑わせたんですけどほとんど様にならなかったです。それはかなり長く続いた雑誌でした。ニコニコっていう雑誌は私は面白くてそれをコレクション

していたのですが、この牧野さんの笑いをみてこれは本物だと思いました。こんなにニコニコ笑って、様になる笑顔を見れる、使える人物っていうのは多分この頃いなかったんじゃないかと思います。牧野さんは多分こういう写真を撮るくらい自信があったんでしょね、おそらく自分がやっていることに。これからの日本というのは植物学でも世界に冠たる国になるぞ。それは俺がやるんだ。いう気迫に溢れていた彼のイメージというのがあると思います。僕はもう牧野さんのこの笑顔っていうのが全てだと思いました。色んな論文だとか牧野図鑑を見る必要もなく、牧野富太郎の人間性というのはニコニコ写真を勝手に撮ってたっていうことだけで言えるんじゃないかと思います。これだけ見ても日本にも沢山、色んな植物学者が出ましたけども、彼は四国の土佐の人間らしいユニークな特徴を持っているんじゃないかなと思いました。

昔、牧野さんの子孫の方に牧野さんのこのニコニコ写真を持って私、牧野さんがこんなに笑顔の写真を持っているのを知らなかったのがこれは凄い。どんな話をするにもこれが大好きだって言ったら、遺族の方も、あれどなたでしたかね、娘さんなんかハタと膝を叩いて、そうなんです。皆ね、だいたい牧野富太郎というと必ず奥さんに迷惑かけて色んな本を買っても貧乏でお金が無くてすごい財産を浪費をし、奥さんもしょうがないんで料亭を開いて旦那の研究のお金を工面した。でその挙げ句に奥さんは亡くなってしまった。いう話で皆な思わず泣いてしまうような牧野の話っていうのが大変多いんですけども、この笑顔が一番凄いついていう話をしたのは、貴方が初めてだと言われて大変喜ばれたんだか呆れかえられたんだか分かりませんが。この笑顔がそういう点では牧野さんの大きな特徴だと思います。ですから、この牧野富太郎の牧野記念館やあるいは牧野植物園の写真を見るとこの顔が必ずどーんと出てきます。是非この同時代の他の日本人の写真と見比べてください。こんなに上手く笑っている人って、しかもそれを写真を撮らせてる人って牧野さん

くらいなんですね。で僕はこれを見て牧野さんに大変関心を持ちました。植物学者ではありますけれどもやってみればみるほどこの人本当に植物学者なんだろうかと思うくらい芸達者でありました。それは皆さんが高知の牧野植物園や記念館に行けばお分かりになってきっと好きになると思います。

次を見せてください。

もう一人、今度はちょっと場所が違いますけども香川の人なんですけども宮武外骨という人。これがまたとんでもない人で、もう四国でしか出ないだろうと思うような人でありました。牧野富太郎もそうだったんですが、四国の人って活字大好きなんですね。活字とか演説大好きで世の中につまりアピールすることっていうのがもの凄く好きになっていうか。関心を持つ人たちなのかなと思うくらいなんです。この宮武外骨、ジャーナリストで自分で雑誌を沢山出しました。香川の裕福な家庭のお坊ちゃんだったわけなんですけども、小さい頃から活字を読むのが大好きで、とうとう大阪や東京で出していた雑誌を私も作ろうというんで自分で作り始めました。作ったのが、確か頓智会雑誌と言って、頓智というタイトルの雑誌でありました。それを皮切りに様々な雑誌を作ったところ自分で300部くらい刷って売ったにもかかわらず、あまりの好評にとうとう本業になってしまった人物です。

最初は牧野さんと同じように、牧野さんは顔で笑ってましたけども、この宮武外骨も自分の話で笑わせよう、そして皆を楽しませようというエンターティナーだったんですね。その証拠に名前が凄いです。宮武外骨^{がいこつ}っていうんです。音で聞くと髑髏のイメージがありますけど字はこう書くんです。外の骨。この宮武外骨が常に言ってたんですが、皆これペンネームだろうと思っていたらしいんですが、これ戸籍上のちゃんとした名前です。皆信じないので必ずサインを求められると、その横にハンコをおしたらしいんですね。これは戸籍の名前だぞっていうハンコをおしたらしいです。勿論親がこんな名前を付かせませんから自分で勝手に戸籍を変えたわけですよ。

最初は亀四郎っていう名前でありました。色々絵本を読んでいると亀さんというのは人間と違って骨格が外へ出ている。私たち人間は骨格が中であって上に肉が付いているんですけど、亀の場合は逆に骨格が外側を固めて肉の部分は中にある。骨が外だから、私は亀四郎って名前だから。じゃあ外の骨で外骨にしようって自分で勝手に名前を付けたんですね。もうここからしてさうとう変な人物でありました。こういうセンスですから売れたんですよ。彼が自分で作った雑誌っていうのが。特にこの頓智会雑誌っていうのは大変人気がありまして、ちょうどその頃憲法が発布されました。明治天皇が議会を作ってこれから大日本帝国憲法を発布するっていう事で有名な議会での授与式を行いました。錦絵にも沢山描かれました。憲法を発布した時に彼はこれをギャグってやろう。って言って、自分の雑誌に絵を載せました。それがこの左側の絵であります。よく分かりませんか。真ん中に立っている人物がまあ言ってみれば憲法を授与する明治天皇であります。でも明治天皇が骸骨になっております。それでコメントが書かれていました。まったくこれ大日本帝国憲法の発布のプロディーです。

この雑誌、頓智会の雑誌であります。大頓智会、大頓智協会っていうのは万世一系の天皇がこれを統治するというのが本来の憲法の文章だったんですけども、この大頓智協会の雑誌は讃岐平民の骸骨がこれを統治するっていうギャグをやったんですね。当時の人は面白かったのかどうか、だいたい憲法って分からなかったですから、何のことなんだか。しかも発布などが付くと、憲法発布って何じゃ？っていうのが全くほとんどの人が分からなかった。多くの方は時々言われますけども、何か天皇がはっぴをくれるらしいという風に勘違いしたらしいんですね。ですからギャグには一番使いやすかったと思います。これでやったやっただって喜んだんですがお察しの通り官憲が押し掛けてきまして、当時ありますから不敬罪です。明治天皇をおちよくったなっていうので禁固3年ですわ。投獄されてしまいました。

本人は何で俺が入れられるの。私は、政治犯でも何でもないし、西郷隆盛みたいに不逞浪士を集めて動乱を起こすっていう人物でもなく、ただ皆に喜んでもらおうと思うギャグの雑誌を作っただけなのに。それでも3年、明治天皇を愚弄したために入れられてしまいました。このへん宮武外骨凄かったです。

今度は刑務所の中で雑誌を発行いたしました。刑務所の人たちに向けて自分の雑誌を売ったんですね。売ろうとした時にやっぱり刑務所の中での規約がありますから、そんなことしちゃアカン。囚人同士がコミュニケーションやなんかを楽しく取っちゃんかんっていうので、これも取りやめにさせられてしまいました。その時に外骨は後で書いているんですけども、あの3年間で私は鍛えられた。どうも日本の官憲だとか政治家だとか実業家の親玉たちは腹黒い。私たち平民が何かしようとする時に必ずそれを邪魔する。挙げ句のはては私たちを弾圧して刑務所になんか入れたりなんかするのを自由にできる。とすれば私は今まで面白い雑誌を作ろうとしていたんだけど面白いだけじゃだめ。国がどうして私たちの幸福のために動いてくれないのかっていうのを告発する、今で言えば反体制雑誌。反体制雑誌の親玉になりました。この3年間の間に。それで次から次から色々な雑誌を出しました。有名なのは面白半分とか滑稽新聞というのを出しました。

次を見せてください。

こんな雑誌ですね。滑稽と反骨が上手くまとった。つまり当時ヨーロッパでブームになっていた風刺ジャーナリズムの日本版を作ったんです。風刺っていうのはマンガを使うのが一番いいんですね。彼はマンガを盛んに使うようになりました。そういえば四国ってマンガ大国でもあるんですけども、この外骨あたりはその走りですね。滑稽の方は左側に出ております。これは当時嫁入りするのに持参金がついていたらしいんです。今でも付いているかもしれせん。持参金の額とその実際に嫁入りをしてくる娘さんの絵がセットになっております。遠いから

分からないかもしれませんが、上からいくと右から左の方へ見ていくと持参金が1万円、1千円、100円でだんだん下がってきます。一番下の左側の美人の場合、もう持参金は問題なくこういう人物が、こういう美人が自分のところに。1万円持参金がつくけど、こういうような女の子よと、今だったらセクハラですよね完全に。こういうセクハラな雑誌を沢山、彼は出していました。と同時に反骨の方ですが、これ右側の方を見てください。これは彼が書いた1ページなんですけど、何か外交機密についての話を書いているんですけど凄いですよほとんど伏せ字です。〇〇〇〇で。たぶん官憲に嫌がらせを受けて伏せ字にしろと言われたから、おそらく外骨のことですから自分で率先してわざと伏せ字にして何か恐ろしいことが書いてあるに違いないと思わせるようなこれもギャグを使ったのかもしれませんが、このようなものを出しました。で宮武外骨、非常に有名なそして人気のあるジャーナリストになりました。

でも彼はそれだけではありません。ちゃんとした交渉や文献や記録も取って沢山の雑誌を、当時雑誌出すとすぐに消えてたんでしょう。なかなかそれをためようなんて、蓄えようなんて人がいなかったんですが彼はそれを蓄えて東大がそれをみて東大に新聞研究所というのを作らせて今でも明治の新聞やなんか雑誌を見ようと思ったら宮武外骨が集めた東大にある新聞研究所へ出かけていかないと全貌は見渡せないというような大きなコレクションを作った人物でありました。この人、四国人らしいんです。とても大好きな人物で皆さんも今再評価されてますよね。宮武外骨。新しい本も沢山出ております。そしてまだまだいます。

次を見てください。

次、こっちは愛媛の方の人でありますけれども、折角4県ありますから4人出しましょう。私の大好きな奇人、木村鷹太郎という人がいます。

これは当時、キムタカとよばれていました。これ本当です。今のキムタクはこのキムタカのパロディーじゃないかと思うくらいです。思想界のキム

タカ恐いぞという非常に有名な人物でありました。

この人物、語学の天才でありまして若くして英語の弁論大会でトップをとったような人物でありました。でも、明治学院大学そこで1位をとったんですが、その校長はあの有名なローマ字を作ったヘボン先生だったんです。ヘボン先生がこいつちょっと過激すぎるから、すいませんけど学校をやめてくださいって言って学校をやめさせられた人物であります。やめる条件として一応卒業という形にして退校させられたんですね。彼は勉強心に燃えていましてもっともっと色んなことを勉強するというので、その後、東大に入りました。東大の歴史をやろうとしたんですけども歴史はつまらないので最終的には哲学をやるようになりました。そして驚くべきことにギリシャ哲学の華と言われるプラトンのですね書いた物、これを個人で全集を出しました。まだプラトンが何者かっていうのがわかんない時代にたった1人で翻訳本を出したという、このままだったら立派な学者になったんですが。でも大正の終わりくらいから、たぶん勉強をやり過ぎたんでしょうね。だんだん妄想が膨らんできて、どう言うんでしょうか、今で言えば、とんでも本のような本を書く人物というふうに見なされるようになってしまいました。

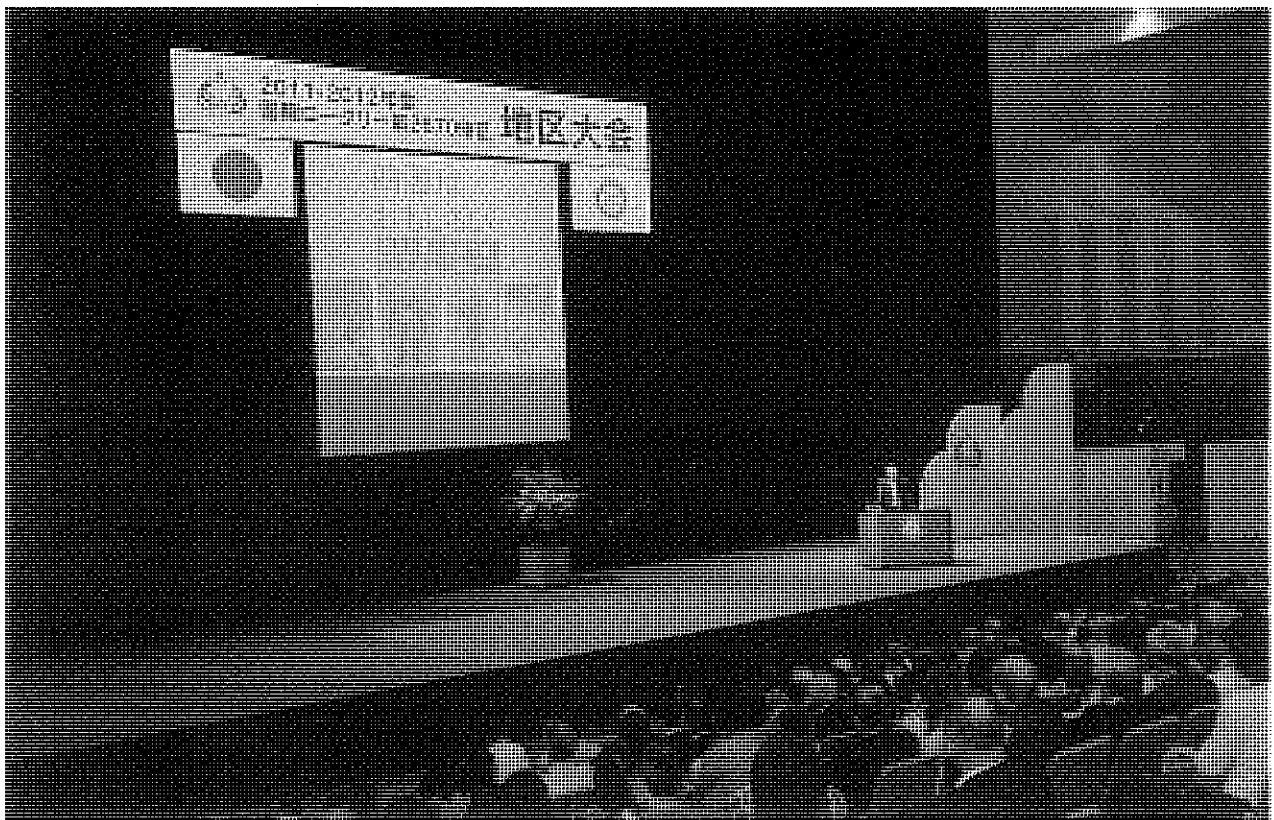
でも無理もないんです。彼が書いた本がここにございます。ちょっと文章を見てお分かりになる通り、これも宮武外骨と同じように伏せ字だらけであります。これじゃ読めないんです。私は彼の本を色々買いましたがどれも時々全部〇がついていまして伏せ字になっていて何が書いてあるんだか分かりません。おそらくこの当時ですから日本の天皇制の問題に触れたのか、まあかなりデリカシーな問題に触れたたんだろうと思うのでみんな〇になっている人物でありました。そのために一体何が言いたかったのか今我々は分からないんですが、この本なんかから察する面白いところっていうのは凄いです。日本っていうのは地球上の全ての文化、文明の元祖であるということを発見した人なんですね。日本は今ちっちゃな島国にいます。でもつい最近まで地球

上全てに日本人の痕跡があり、昔は日本ていうのはヨーロッパ大陸の大きな場所に住んでいて、インドに住んだこともあり最終的には一番長く住んだのはエジプトである。そしてエジプトで住んでいた頃の日本の文明、これがヨーロッパに伝わりそれがギリシャ哲学だとかローマ文化などに伝わった。だからエジプトっていうのは最初日本人が住んでいた。こういう発想を持ちました。そして、その隣りにいたのがヨーロッパである。ヨーロッパにいたのがこれが中国人たちである。だんだん中国も日本もだんだんだんだん東の方に移動していった。彼はそれを綿密に論証していました。あまりに綿密すぎて呆れかえるほどです。

まず第一に、僕が一番驚いたのは、魏志倭人伝っていうのがありますよね。中国の本で大和、邪馬台国というのが海の彼方にあってそこまで海上を何日行って、陸上を何日歩くと着くっていう有名な教科書に出てくる魏志倭人伝っていう部分があります。その当時から色々計算しても九州に行っちゃうって

いう計算と、それから大和の方に本州の方に行っちゃうっていう計算する人によってどうしても一致をみないという不思議な文献なんです。あれ未だにやってますよね。九州に邪馬台国があったのか、大和に邪馬台国があったのか。魏志倭人伝の時代に実際に行った人がいる訳で、その人たちがちゃんと細かく海上を何日行くと書いてあるんだから分かりそうなもんなんだけど、あれ未だにそういうふうに一致しないんですね意見が。でも木村鷹太郎はその理由を明快に言いました。それはね、日本と中国がエジプトとヨーロッパにいた頃の話なんだよ。ヨーロッパにいた中国がエジプトに行ったわけですから、それは今彼らがずーっと移っちゃった後の中国大陸とそれから島国の日本の関係として考えたって当たる訳がないじゃない。地中海を渡ったんだよ。地中海を。と言いたげな文章を作りました。それだけじゃありません。ヨーロッパで伝わっている有名な古代の哲学者やなんか皆日本人であった。

凄いのがありますよ。マホメッドっていうのがいま



す。イスラム教の開祖であります。マホメッドっていうのはあれは厩戸^{うまやど}だって書いてある。厩戸って厩戸の皇子ですから聖徳太子であります。厩戸っていう言葉がだんだんなまって行ってモハメッドになった。だからモハメッドはあれは聖徳太子である。この調子で全部やりました。アリストテレスは誰。アリストテレスは確か山鹿素行だったですね。山鹿素行って江戸時代くらいの人じゃ・・・その時代のズレはどうなってんだ。っていやいや、それはさっき言ったように日本が島国になっちゃった時に色々と書き換えたのである。というような意見をいいました。

それから空にある色んな星座。この星座も日本の人々が皇室に捧げるために全部付けた星座で、それぞれ意味があるんだと。例えば蟹座っていうのがあります。こういう形した蟹のような形した、あれは日本がまだガンジス川流域にいた頃、カルカッタにいた頃の地形を空のイメージとして記録で残したんだよ。何でだって言ったら。蟹っていうのが、あの辺りの一つの名物である。カルカッタのイメージっていうのをそこに上手く繋げた。もう一つの理由はカルカッタ周辺にはカーリーというインドの神様がおります。カーリーって時々マンガなんかに出てきますが手が8本くらいあって、剣持ってるやつです。これ見てごらん。カルカッタの神様カーリー。蟹じゃないの。って言うんで。あ、蟹ですね。日本がその頃いた時に動乱が起きたらしいんですね。この動乱。蟹の形をした土地の中で起きたんで、これが後で日本が島国になった時に子どもたち向けの民話になった。これが何と猿蟹合戦だ。永遠とこの調子で書いてる。数年前まではプラトン全集を訳してた人ですよ。この人はでもね無理はないんです。この当時調度大正末くらいから昭和初期くらいになって、当時の社会状況を考えてみてください。日本が初めて日清、日露に勝ちます。世界に没して今まではちっちゃな国だったんですが、ひょっとしたらやれるんじゃないかというような半分勘違いのようなこと起こし、日本が世界の文化に文明に対してどのくらい大きなヘゲモニーというか覇権を

持っているかっていうのを色んな面で示したんですね。一面では軍備の増強などがあり、そしてもう一面では植民地闘争のようなものがあります。文化の方でも同じようなことをやったんですね。日本の文化っていうのは偉いぞっていうことを示すために。その極限がたぶん木村鷹太郎さんだったと思います。

木村鷹太郎さんの本は今ではもう古い本になってるんで国立国会図書館のデジタルアーカイブなんかからでも読むことができますが、まあ凄いです。ほとんどこの人今いたら絶対吉本興業だと思います。さんまだとかあの辺よりも全然この無理矢理なギャグは上手いですね。ギャグっていうと怒られるんですが、非常に面白い人物でこういう人物がおります。しかも自由民権運動などがあつた、この人は確か宇和島の出身だったと思いますが宇和島なんかにいた当時の四国の意気込みっていうのがよくわかります。これも四国の人なんですね。

次を見せてください。

極めつけ、先ほど言いました蜂須賀正氏さん。見て下さいこのダンディーな若き貴族であります。新聞で人気だったっていうのも分かりますよね。今で言えば韓流スターみたいなものであの外国人、とにかく英語が上手いですから日本人なだけども外国人的な羨望の目で皆見ていた人物でありました。しかも彼は本当に真面目な鳥類学者であります。生物地理学の面でも多大な研究成果を与えました。しかし、生活ぶりはもの凄く派手な生活をしました。冒険と秘境です。

彼、飛行機を操縦できましたから、戦時中に確か爆撃が行われるような状況になった時に自分の自家用飛行機で日本から脱出しようとして多分、確か止められた人だと思いますし、世界を自家用機で回ろうとしたそのくらいのスケールの人でありました。そして鳥類学者なんですけど、この鳥類学者でもやることのスケールが違っておりました。とても普通の鳥類学者では考えようが無いようなことを彼は考えた。

ちょっと見て…ここに今私が言った熱海の別邸がありますね。最初にテレビ番組作ろうとして、この

別邸でターザンのような暮らしをしていた蜂須賀正氏の姿を再現しようと思ったんですができなかったです。

彼の次を見せてください。

やったこと。一番有名なのは昭和の始めくらいに日本にいられなくなってしまって、あんまり色々な問題を起すんでお父さんが心配をして、「そろそろイギリスで大人しく勉強しとれ」っていうんで日本を出発しようとした時に彼は探検をやりたいっていうんで、探検をすることになりました。フィリピンの探検です。その時に東大の教授がフィリピンに行くなら是非見つけてきてもらいたいものがある。「何ですか。」「有尾人っていうのがあるらしい。」「尻尾がはえてる人間っていうのがあるらしい。」

ここにちょっとありますね。

大正時代の博覧会に実際に南洋館と言うところに有尾人っていうのが出たらしいんです。本当かどうかわかりません。絵はがきが残っているだけです。これなんかお尻のところちょこっと尻尾が出ていますけども、こういう噂が当時流れておりました。学術探検隊がこれを真偽を確かめようとしていました。東大は蜂須賀さんに頼みました。是非フィリピンでこの有尾人を探して。彼は有尾人がいるという村まで行ったんですが見つかったかどうかははっきり書いておりません。たぶん見つかってなかったんだと思いますが、こういう探検をやったんで日本で有尾人ブームがおきました。

皆さんが子どもの頃におそらく読んだかもしれません。少年探偵団という江戸川乱歩の連作がありますね。必ず1回は読んだと思う。あれの一番最初の怪人二十面相っていう巻の出だしは日本の若き華族がフィリピンに有尾人を探しに行くっていうことで日本中が沸き立っているっていう話から始まっているんです。蜂須賀さんの話ですよ。江戸川乱歩も大変関心を持っていたんですね。

その蜂須賀さん、生涯に大きな仕事をしました。それが下にあるドーダーの研究ですよ。ドーダーを含めた絶滅した鳥たちの研究でありました。しかも

ドーダーの研究をすると途中で必ず急死をするという悪いジンクスが当時世界の学者の間にささやかれていました。この前に研究をしようとしたイギリスの鳥類学者はそのジンクス通り亡くなっちゃったんですね。蜂須賀さんはこれに挑戦をしました。

そして素晴らしい本を、おそらくこれ今になってもドーダーの研究書としてはこういう素晴らしい絵も入ったナンバーワンの本じゃないかと僕は思っています。この本を完成をいたしました。そしてその刷り上がった本がイギリスで、イギリスで刷らしたので全部英語なんですよ彼の本は。英語版の本が日本に送られてくるのを楽しみに待っている時に急病で亡くなってしまいましたから、本当にジンクス通りになっちゃった人なんです。

様々な伝説を残したこの蜂須賀さん。もちろん阿波徳島の蜂須賀家のたぶん最後の男の当主だったんじゃないでしょうか。この蜂須賀正氏さんは私大好きで非常に関心を持ちまして、最初にテレビ番組作ったんです二十数年前に。だからこの忘れられない人物なんですね。四国と縁ができたきっかけを作ってくれた人なんじゃないかと思えます。

次を見せてください。

今まではずっと奇人のお話を4人紹介しましたが、タイトルは奇人と偉人でありますから偉人の方をこれからお話を進めたいと思います。

私四国で色々な見物をして取材を致しまして一番印象に残ったのは四国の人たちっていうのはどの藩も、あるいは今にいたっても四国という独特な自然の恵み、あるいは自然の特徴を活かしてそれを産業化したり文化化したそういうことに非常に巧みな人たちの住む場所だったんだなあ。そして、この四国っていうのは日本の国内を見ても大変ユニークな場所なんだなあってことをつくづく感じました。

その一番大きなきっかけになったのは塩であります。なかなか塩って重要なんですよ。ここにも書いてあります通り、これがないと人間生きておれません。塩って具体的にNaClっていう塩化ナトリウムが主成分なんですけど、塩がないとまず脳のそれぞ

れのパルスで交換をする脳の思想伝達系統っていうのが働きませんし、筋肉も力を出しません。そして呼吸にも塩化ナトリウムの力が必要でありますし、あらゆる面で人間を動かす一番大きな元素の一つであります。これは言ってみれば鉱物なんですね。鉱物ですから人体で作れないんですよなかなか。なかなかっていうか全く作れないんです。他の動物もそうです。だから塩が必要なんです。塩を舐めに行く必要があるんです。猛獣たちやそしてその獣を昔飼っていた、獣を飼っていた狩猟をした民族たちは屠った動物の血を舐めました。血の中に塩が、先ほど言いましたように呼吸に非常に関係が深いんで血の中に塩があり塩分が含まれております。色々な部分に塩分が含まれているので、狩猟民族は屠った獲物を食べて塩を補給していたんですね。

でも日本のようにやがて農業国になり植物を主として、お米なんかを主として食べるようになってお塩ってなかなか補給できない。それから草食動物もそうですね。年中草食してますからなかなか塩が補給できない。草食動物はどうしたかっていったら山に行くと塩があるような鉱山地帯を岩塩があればそこで塩を舐めたんです。あるいは汗で塩が出ますから汗のコントロールで塩辛いのは塩分がちゃんとそこで作用してるって意味です。塩を舐める可能性もあったんでしょけども草食動物っていうのは塩を外から取らないといけなかったんで、ですから塩を置いておくと草食動物は近づいてきました。家畜って、おそらく牛とか馬あるいは羊なんかを最初に手なずけた最も有効な方法の一つは塩を置いたことだと思います。

ですから皆さんも聞いたことがあるんじゃないかと思えます。昔日本で、平安時代もそうでしょうけども男の人は夜になるとそれぞれ気に入った女性の家にお泊りになるという習慣がありました。つまり、母系社会でありましたから家は女の人を持ち、男は根無し草のようにふらふらふらふら動いていた。という生活のスタイルがありました。女性たちが男の人たちの足を止めさせるために何をやった

かっていったら牛車を引っ張る牛が止まりやすいように門の前に必ず盛り塩をしたわけです。草食動物は塩にとっても弱いんです。我々もそうですが。塩を舐めに寄るんでそこで止まらざるを得なくなる。そういう風習があるんで未だにですね料亭なんかそうですよ。お客さんが来るために、お店を開けると盛り塩をしています。あれはただのお払いとかあるいは縁起担ぎじゃないんですね。もともとはそういうそれぞれの生き物の特徴を表しているものでありました。命に非常に必要だ。

ですから中国なんかでは塩がすぐ専売になりました。秦の始皇帝なんか塩から上がる税金や、あるいは塩を専売制にして王室でしか売らないようにしてあの万里の長城なんかを作ったと言われてます。塩が重要なのもう一つは腐るのを防ぐ。つまり保存のために使う。これがとても重要なポイントを持っていました。肉なんかほっときゃ腐ってしまいます。塩漬けにすることによって長く保存ができます。これはもう大変な力でありました。そしてただ塩を付けるんじゃなくて、ほっとくと発酵をしますんで味がよくなってくる。つまり発酵食品になる。塩と麴と水を混ぜれば、だいたい発酵食品になってきますから。実は四国なんかではその発酵食品がどこへ行っても沢山あります。発酵食品のような加工技術を伴った文化も成立をし、そして塩を直接専売制にしたり、あるいは財政の源にするっていうのは日本も同じでした。そしてその大きな柱が一番いい上質な塩を供給した、大量に供給したのが四国でありました。言ってみれば塩の島だったとも私は言えるんじゃないかと。

有名なのは赤穂浪士の赤穂の塩ですね。でもあれは瀬戸内海を挟んだ向こう側ですから季節、自然環境的には似たようなもんなんですよ。だいたいこの辺の太陽がギラギラ照って、そして潮の満ち引きが激しく鳴門の渦をまいているようなあんな激しい潮の満ち引きがある所ってまさに塩を取るのに非常にラッキーな場所でありました。日本でも何カ所か日本海側にもあったんですけども、そういう塩を取

るっていうことが大変重要な場所で四国はたぶんかなり古くからこれをベースに置いて暮らしを成り立たせていたのではないかと思います。

次を見せてください。

あ、ちょっと待ってください。面白い話をピックアップしましょうか。

あのミイラね。エジプト、先ほど木村鷹太郎が日本はエジプトに住んでいた。あのミイラ、エジプトで成立した最大の大きなポイントはやっぱり塩に塩が含まれていたからです。あっちの方へ行くと砂漠の所へ行ってもオアシスなんかがありますが、飲んでみると真水ってあんまりない。ほとんど塩水。岩塩なんか溶けたような状態で塩があったんでそこに埋めたり、あるいはそれを上手く利用することによって防腐剤になったということから多分ミイラ作りって一つのスタートをしてるんじゃないかと思われるくらいであります。

一番最後にちょっと富の象徴ってというのが書いてありますが、インドの塩の行進っていう有名な事件があります。この事件なんか塩の重要さを如実に物語っています。イギリスがインドを支配した時に財をなす一番大きな源にしたのは塩でありました。イギリスが塩を生産し、それを消費地であるインドに売りつけたんです。インドの人がイギリスからの塩じゃないと買えなくしてしまいました。それに怒ったのがガンジーでありました。インドでも塩を作ろうと思えば海水を煮詰めればできるんです。塩なんか、しかも高い関税を掛けますからね。イギリスは高い関税をかけて塩を逆に買わなきゃいけないんだったらもうこれは搾取の何ものでもないというので反抗運動を起し、イギリスの塩を買うなという運動を行いました。そして自分たちで塩を作ろうというので、海岸を行進しながら塩を作ったんで捕まっちゃいました。イギリスはもうとんでもない奴だと捕まえました。でも民衆は支持をし、やがて塩の行進というデモンストレーションを起すようになり、これがだんだん民衆運動とインドの独立運動に関係をしてきた。やっぱり塩なんです。塩をどうやって

コントロールするかっていうのが大きいんです。

中国でも王朝が変わる。唐なんかもそうですが大活躍したのは塩商人でありました。専売の塩はもの凄く高かったんです。税金を付けて。でもモグリ塩商人がちょっとでも安く闇で売れば、闇商売なんですけど住民、市民助かったんですね。安い塩を。だんだん富を蓄えていざクーデターを起こすっていう時の後ろの黒幕っていうのはだいたい塩商人でありました。ですから中国では塩族と呼ばれているんですね。王朝を倒す一つの悪いグループはこの塩族である。塩の族です。こういう人たちが暗躍していた。そのくらい塩って面白い問題を含んでいます。

次を見せてください。

これをやっている時間すぐ終わっちゃうんで次をどうぞ。

もう一つ重要なのは塩っていうのは日本では海水なんです。潮の塩なんです。でも中国の漢字の塩っていう字はあれは岩塩の塩なんですね。古い字はあそこに出ていますがあ塩の一部は岩塩っていう意味です。世界の多くは岩塩なんですよ。海水から塩をとってそのまま使っているっていうのは日本、なかなか珍しいと思います。理由は簡単です。岩塩が無いからです。だから海水を昔からとっていたんです。だからたぶん四国あたりが塩を作り始めたのはとても重要な要素を持っていると思います。

次を見せてください。次をどうぞ。

私一番感動するのは讃岐の有名な発明家で平賀源内。大変有名です。和三盆を作る製造の源を明示したという人物でも、砂糖業の開祖という形でも源内有名ですよ。[物類品隲]という本を見ても砂糖の製法が書いてあります。で最後に白い砂糖の作り方で書いてあります。つまりこれが和三盆の源でした。でも源内の時代にもかなり後になってもなかなか和三盆というのは難しくできませんでした。

でも塩の方はもっと重要な人物が貢献をしています。これが久米通賢、みちたか。「つうけん」で読めますが。この久米通賢という人物でありました。讃岐にいきますと源内の再来と言われますが、よく考

えると源内より全然凄いです。源内って色々とアドバルーンを上げてサンプルは作ったんですけども産業化したものはあまりないんですね。でも通賢さん塩田作りました。塩田を作って破綻に貧していた讃岐の高松藩の財政を立て直しました。しかもこれ自分で計画を立て、当時藩はお金が無かったので多くは自費を払って作りました。そして今のこの阿波の塩も有名ですけども瀬戸内海の塩の一つのシンボルである讃岐の塩の一番源を作った人物。これいるんですよ。この人物なかなか凄い人物であります。彼が巨大な工事をした入り浜式の塩田法っていうのが凄いですねこれが。大量生産が可能になりました。

次を見せてください。

その前まで古代の塩って藻塩って言って海藻にくっついたやつを煮詰めてミネラルたっぷり灰たっぷりの塩を作ったんです。だから混ぜ物が相当あるんですけど多分体には相当良かった。こういう塩が作られていました。今でも塩竈神社っていう所にいくとだいたいご神事で同じように藻塩を作ってますね。左の上の方に海藻を煮詰めてあの海藻からまたさらに塩水をかけて塩を結晶化させるという作業が未だに行われ、今塩はかなり自由に作れるようになったんでこの藻塩って復活してます。地元の塩って言って美味しいミネラル入りの塩はこの古代の製法に乗っ取ったものが作られていました。しかしこれも凄いい手間がかかるんですね。

で次に出てきたのが、次を見せてください。その前にもう一個あった藻塩っていうのはやっぱり大きな塩の財源の一番古い形だったので今でもこの面影残ってます。今は使われなくなりましたが明治時代に盛んに出たひき札っていう商業広告、ポスターが出ていてだいたいお金が儲かるめでたい縁起のいい絵柄が選ばれていました。七福神だとか宝づくしとか、その中に海藻を刈る夫婦っていう絵が沢山出てきます。これ塩作りの藻塩を集めている絵なんですね。このあと藻塩を集めてこれを煮詰めるわけで、夫婦はこうやって玉藻の玉のついた藻のようなものを集めています。

この絵、何で商売に使われるかっていったら「藻を刈る」ので「儲かる」なんです。木村鷹太郎ですね、ほとんど。こういうものを使われていた絵がずっと残っています。これが言ってみれば藻塩作り。

この後、次を見せてください。

いよいよ潮汲みというのが始まります。この潮汲み、安寿と厨子王という話があって山椒大夫の所に連れてこられた安寿が桶を担がされ潮を汲んで塩田に持っていくという話が、森鷗外が山椒大夫っていうところで書いてあります。あれはまさに丹後ですから日本海側の塩田の話なんです。

それで日本舞踊をなさっている方はやっぱり潮汲みっていうのがあって、左側をご覧になれば分かる通り綺麗な服を着、普通男が頭に着ける烏帽子っていうのを頭にのせた美しい女性が潮を汲む桶を担いでいる日本舞踊があります。潮汲みというのがあります。これ塩田、まさに塩田なんです。ただし塩田なんですけれども人間が潮を汲んでくるというところがポイントです。大変ある意味では手間がかかります。特に日本海側に安寿と厨子王の話は、山椒大夫というのは、あの話では丹後ですから日本海側の話なんですね。あっちの方だったらおそらく安寿を初めとして潮を汲まなきゃいけなかったと思います。なぜなら日本海側って潮の満ち引きが少ないんです。だから人間が潮を持ってきて砂浜にまいて塩をとって、塩が付いた砂を煮詰めるという作業をやらなきゃいけなかったんですが、日本海側ではなく太平洋側や特に瀬戸内海の側はさっきも言いました通り、潮の満ち引きが非常に高い。これ何を意味するかって言ったら、この潮の満ち引きのパワーを使えるんです。満ちた時に、この辺が全部潮になった時にブロックしておけば潮が引いたあと自然にプールができます。この潮を使えば人間がわざわざ汲まなくてもどんどん海水が溜まるので入り浜式というスタイルができるようになりました。

次を見せてください。

あ、これ昔のですね。こうやって潮をブロックして引いた時にその溜まった潮を天日で乾かし砂に潮

をつけてそれを煮詰めるようにする。その変わり砂を運ばなきゃいけないんですけどね。砂を運んでそれに海水かけて煮詰めなきゃいけない。でも全然今までやられていたあの潮汲みのお姉さんがやっているような揚げ浜式に比べれば全然大きな収穫があったんです。この方法を取り入れたために大変質の良い塩ができるようになりました。やがてこれがさらに改良されてつい最近まで、この辺でも見られたかと思えますけども木の枝なんかを間にのせて、木の枝の上から潮水を落としてもっとその効率よく大量に塩を回収できるような流下式っていう方法などが使われるようになったんですが、この入り浜式って画期的な発明でありました。海水の勝手に満ちてくる力を利用するという点ではまさに大きな発明であります。久米さんはこういう方法で讃岐の財政を回復させたんですね。

砂糖は平賀源内に由来し、塩は彼に由来するんですけどこれ一事をもってしても四国ってこの塩の力っていうのがとても大きかったのではないかと。ついでに言いますと徳島の方も同じです。やっぱり塩っていうのは大変重要な、後に藍っていうのが出てきますが藍だけではなく、塩もこの徳島辺りは非常に重要な役割を果たしていました。そしてもちろん砂糖もです。和三盆。讃岐だけでなく阿波の和三盆も非常に有名な。地形や環境が非常に同じような適合性を持っていたからそうなったんだと思います。他の地方ではなかなかできないですよ。塩田色々出来たけれども、例えば吉良、赤穂浪士でやられた吉良上野介の所も塩田があったんです。でもやっぱり技術革新ができなかった。それから規模が小さかったっていうことのために浅野が憎いっていうのがベースにあったんだと思うんですね。塩作りで。大きな、当時赤穂の塩ってかなりブランドでありましたから。そんなのが背景にあって浅野内匠頭をいじめたっていう説が最近出てきてる通り、塩の問題って大変重要なんです。

次をみせてください。

塩に関係をしてもう一人、別の人物をこの徳島に

関係のある人物のお話をさせていただきます。関寛齋という、今でも徳島では記念碑とかがあるから有名だと思いますが、この人はもう実に壮大で面白く偉人中の偉人だと思いますよ。生まれは四国じゃないんですが長く徳島藩でしかも幕末の時代にですね一番動乱の時代にご典医をしていたお医者さんでありました。この人物、長崎で外人の西洋の医学を学んだ人物でありました。これをバックアップしたのが和歌山の醤油屋であります。濱口梧陵という有名な人がバックアップして勉強させました。そして幕末にコレラが流行ります。そのコレラの撲滅方法を確立した人物でありました。この関寛齋。また長崎で勉強を続けようと思った時に徳島藩の重役たちが是非うちの藩に来てくれと、まだ20、30くらいですね若い関寛齋を呼びました。つまりスカウトしたんです。貧乏な暮らしをしていましたが初めてご典医という立派な職業を得たんですけども彼は一生懸命この役に勤めました。最初は相当いじめられたらしいです。どこでもそうでしょうけど、よそ者がいきなりご典医になったと、しかも蘭方ですから。当時はだいたい漢方の医者でしたから。

でも彼は怯みませんでした。ものすごく頑固一徹な心の強い人物でありました。やがて徳島でも関大明神というあだ名が付くようになりました。今でも言うんじゃないですかね関大明神。何故かっていったら殿様の健康を診るだけじゃなかったからです。

戊辰戦争が始まり、鳥羽伏見の戦いになった時に蜂須賀のグループっていうのは鳥羽伏見の戦いの官軍のグループのバックアップに回されました。そして野戦病院を作られました。この野戦病院の院長に関寛齋を任命しました。でもこの人凄いのは敵味方関係なく治療したことであります。

当時の蘭方医って本当に頭が下がります。今は赤十字思想っていうのがあるからそうしなきゃいけないんですが、当時相当官軍のトップから言われたんだと思います。何で敵を治すんだよ。こっちが負ける可能性を作るんじゃないか。でも彼は医者患者を治すものなんだ。そういう政治だとか動乱には関

係ないんだ。という精神をすでに持っていたんです。おそらく外国の医者から技術を学んだ時に医者の心得っていうのを学んだんだと思います。同時に医者って一人の患者を治すだけではなく当時コレラを初めとする流行病が、梅毒もそうですが下手すると日本潰れるってような大きな害毒を流す、今と同じですねサーズが流行ったり、インフルエンザが流行ったりする。こういう病気にも対処しようとして社会衛生というのを充実するようにいたしました。特に彼がやろうとしたのは天然痘だとか梅毒であります。そういう診療所を作ろうという風に徳島藩のトップの方を説得したんですがなかなか動いてくれない。

しかし、それやこれやで大きな力を持ったにもかかわらず彼は徳島に戦争が終わった後、戊辰戦争が終わった後徳島に帰るんですけども、もう藩士の医者はやめたと行って町医者になってしまいました。

そしてほとんど、なんて言うか赤ひげなんですね。貧乏人の病人っていうのを優先しました。そして貧乏人ですからお金払えないんでお金はいっさい受け取りませんでした。しかもお金が無い人には食べ物や本当にお金をそのまま渡したという。自分の暮らしが成り立たなくなるくらいそういうことをやった人物でありました。こういう人物って幕末にいたっていうのは多分四国だけではなくて日本でも誇るべき問題だと思います。ナイチンゲールはいるんだけど、ナイチンゲールにも劣らない人物が日本にもちゃんといた。それが徳島藩の元ご典医だったということはとても重要な問題であります。

しかも彼はもう医者やってもしょうがないっていうんで最後は北海道に入植をいたしまして北海道で新しい新天地を築こうとしました。しかし息子さんたちが彼の思想に協調できず最後、彼は絶望して毒を飲んで死んでしまいます。

この伝記読むと驚きますよ。実は徳島藩の多くの人々は幕末の戦争が終わった後、北海道に入植しています。特に洲本とか淡路の方にいた人たちは本家の蜂須賀のグループと袂を分かち自分たちが新しい

藩を作って北海道に入植をしたんですけども行ってみて驚いたそうです。熊がいるはブヨがいるはでとてもこんな所には住めない上にアイヌの人たちは裸で暮らしていたんです。それを見て彼らは全部驚きました。これ裸でも暮らせるような体力がないと北海道にとても住めない。というくらい驚いた上に、何度か入植の船が行くんですけどもその内の一隻は和歌山の沖で遭難をいたしました。沢山の損失を得たというくらい大変な北海道への移住を実は徳島は、やっておりました。結局北海道で藍の栽培を成功させ、やっぱり藍ですよ。最後は、藍の栽培を成功させ本家よりも安い藍を提供できるようになったためになかなか難しい問題にもなったと思いますが、北海道で成功した士族グループのごく少ない内の一部だと言っている。

阿波から行った人々なんですけど、関寛斎も名誉を全部振り捨てて七十何歳だったか、七十三歳の時にいきなり奥さんに行くぞと言って全部屋敷を売って北海道に出かけてしまいました。20年間熊やオオカミやそしてブヨと戦いながら開墾したんですけども息子さんたちと意見が合わず自殺したって、やっぱりとんでもない人生であると思います。その関寛斎。ここにいてご典医やってたんですよ。これ非常に面白いと思います。もし皆さん関心があるんだったらいい本をご紹介します。

次を見せてください。

司馬遼太郎が『胡蝶の夢』っていう4冊になる、これ司馬遼太郎の中で一番面白い本の一つだと思います。『龍馬がゆく』もいいんですがこれですよやっぱり。特に徳島の人これ是非読んで。関寛斎、何人かの主人公の一人です。特に北海道に行ってから名誉ある医者役割を捨てて北海道開拓になってから息子と折り合いが悪くなってついに自殺してしまうまでのところって凄いです。こんな人物徳島にいたのかと思うくらいであります。この人物が載っている、今、顕彰館とか色々出ていますが関寛斎は私、最も最近関心を持っている人物であります。

この人実は、塩と大変関係があります。何故かっ

ていったら塩を原料にして作っている醤油、湯浅の醤油っていう和歌山の醤油の御大であった濱口梧陵という醤油屋のおやじさんに見出された人物だからです。つまり塩の財政によって勉学ができた人物の一人なんですね。やっぱり四国的な人物だと思います。

次を見せてください。

土佐の方へいきますね。土佐、土佐も同じなんです。実は土佐ってカツオなんですけども、私今日お話ししたいのは鯉節です。この土佐節、今私たちが食べているあの硬い、頭をかち割るような硬い鯉節の原型になった鯉節です。鯉節って昔から三段階あって、塩入れて煮詰めただけっていうなまり節っていうのがあります。その次が焙煎をしたりあるいは燻らしたりする。つまりスモークをしたり火を通すことによって天日でなく、天日や火力ではなく煙で燻らすことによって作り出す。通称あら節って言うんですけど。そういう新しい第二ステップの鯉節ができて味がグンと良くなりました。さらにこれがカビを作用させることによってアミノ酸がギュッと凝縮され、しかも水分を吸ってカチカチになる枯節とか本枯節。通称土佐節とかって呼ばれるものになっていきます。今の私達が食べている鯉節の元祖の一つは元々は紀州から来たんです。土佐の鯉節って言うのは新しい非常に重要な鯉節になったと思います。関東の方ではですね土佐の伝説が出来ました。それが土佐与市という人です。

次お願いします。

土佐与市っていうのは僕も大変関心があるんですけど、なぜなら関東でどこでも聞くんですね。昔から鯉節を作っていた房州だとか伊豆半島の田子なんていう所では、昔土佐から一人の若い職人、鯉節職人がやってきて病気になって倒れちゃったんで助けてやって面倒みてやったらえらく感謝をして、そしてその感謝の印として秘法中の秘法、土佐や熊野では絶対門外不出だと言われていた新しいタイプの鯉節の作り方を教えてあげようというので教えられました。それによって今の鯉節ができてくるようになった源はこの人がつくったというふうに使われています。

そういえば和三盆の砂糖も同じような伝説が四国にあるんですね。当時砂糖の作り方っていうので一歩先をいっていた確か薩摩の砂糖作りの人が四国のお遍路をやっていて病気になっちゃって讃岐のどこかで苦しんでいた時に助けてもらった。お礼に薩摩で絶対秘密の砂糖の作り方を伝授しようと言って伝授したためにその砂糖の具体的な作り方、そしてなおおまけにサトウキビを持ってきてくれたらしいんですね。わざわざ薩摩から。こんなの見つかったら多分、打ち首になってたと思います。そういうようなリスクを負ってどうもこの四国には色んな新しい産業がたぶん入ってきた。鯉節の場合は逆に秘密になっていた新しいタイプの土佐の鯉節が関東に渡ったんですね。

次を見せてください。

私見学に行きました。実は10年くらい前に鯉節の日本で一番大きな間屋であり販売店であるというにんべんというのがあります。鯉節と言えはにんべん。あのにんべんの主人の小説を書いたことがあります。その時古い作り方を未だにやって土佐の鯉節の作り方をそのまま伝統として残る場所があるから見に来てってやるというので連れてってもらいました。それが田子節と呼ばれるものであります。田子節って土佐節の改良版だと言われている。見て下さい。燻すためにまず生の状態で切ったものが、あれが右の上の方。炉の上に置かれてスモーク上で乾燥させられるわけですね。普通天日で干したのと違ってスモークに近いものですから香りとかあるいは凝集度というのが全然違って味がグンと良くなります。

下の方にできたのが今度カビ付けであります。カビって4回も5回も付けます。このカビっていうのがなかなかバイオテクノロジー。鯉節のもの凄いところであります。そして出来上がったカチンカチンの鯉節をそのまま出荷するんじゃないんです。今度彫刻するんです。この彫刻名人のおじさんがナイフで削っておりますけれども今の見るような舟形の何かいかにも、こう持って何かやりたくなりそうな

削りたくなるようなあの形に彫刻をするんです。彫刻をしてからやっと出荷するというこういう沢山の手間をかけて作って現場がまだ残っております。にんべんの幹部の人に言わせるとこんなものは今の商業のスタイルでは経済的に全く合わないんでどこでも無くなってただけでも、にんべんはこういうような土佐から発達した新しいタイプの鯉節を日本中に広めた商店だからこれは自分の責任上この一番古い作り方はキープしとかなきゃいけないというんでほとんど赤字覚悟で田子の人々に未だに古いものを作らしているのを見ることができます。見に行きましたが、本当に手作りの鯉節が未だに残っているんだとは凄いですね。

これも源は土佐で、土佐与市は那須与一より遙かに凄いですね。この土佐与市は関東では非常に有名であります。でもこの土佐与市って土佐の人じゃないんですね。紀州の人なんです。実はその前に土佐にカツオを追っていて漂流した漁民で甚太郎っていう人がいてこの人が土佐に紀州の鯉節の作り方を伝えたんですね。それを土佐でまた改良してカビ付けなどをするようにしたものが、今度はこの土佐与市っていう者が紀州からそれを学んで土佐スタイルの鯉節の作り方を広めたという順序になるんで、土佐与市って土佐の人ではないんですが土佐っていうのが付いているのが非常に僕は面白いと思うんです。色んな物が流通し、それも昔はシークレットだったものが広がる原因っていうのがやっぱり土佐のような一つの、言ってみれば黒潮も流れていけば陸上もあるという色んな物が出たり入ったりする場所の大きな役割だったんじゃないかなと。土佐与市のように命を削られるのを覚悟でそういう物の情報を流したっていうことは関寛斎と似てると思う。

次を見せてください。

いよいよ最後かな。これで最後になりますけれども。私は愛媛っていうのは一番縁が薄いといたしますか、なかなか仕事で合致しなかったんです。だから他の県に比べれば、どういう県なのかイメージがよく湧かなかったんですけども、私一つ思い出すのは今

から十五、六年前に先ほども色々とお話が出てきましたけれども、日本で海外との交流によって色んなイノベーションをしたっていうことを象徴的に取材できるテーマは無いかなと思いました。そして思いついたのが幕末から明治にかけてのお雇い外国人。日本に沢山やってきた外国人たちの動きを見ることでありました。

色んなタイプの外国人、お雇い外国人を取材しましたが最後に未だに日本で助っ人外人とっているジャンルが一つあるんです。そうですプロ野球なんです。プロ野球は未だに外人を助っ人と呼んでいます。つまりお雇い外人という当時のイメージがいまだに残っている数少ないジャンルなんでこれは最後に助っ人外人に取材しようというので当時、東京でレストランかなんかを開いていた与那嶺要っていう人物がいてハワイからやってきた巨人軍の不動の3番だったかな。首位打者かをよく取った、1番だったか不動の1番の与那嶺要という人にインタビューをしたことがありました。

そしてその時に聞いたのは野球の、特にプロ野球の前夜の話でありました。日本のプロ野球がどうやって出来たのか。そしたら驚くべきことに伊予がその非常に重要な役割を果たした県であったということを知りました。四国の方はよくご存知でしょうけど、ここでプロ野球の大同を成功させるような人物が沢山でている。

一人は正岡子規で、あの俳人の正岡子規。これは有名ですよ。

それからもう一人、もう一方が押川親子っていうのがいるんですね。これも松山の人でありました。押川方義っていうのと。これが日本で最初に教会を作ったプロテスタント教会を作った牧師さんですが後に政治家になりました。この押川さんもまた東北で布教をしながら東北学院とか宮城学院という学校を沢山作りました。重要な人物の一人ですが、この息子が凄かった。長男が押川春浪といいます。

先ほどもちょっと言ったかも知れませんが四国ってSF作家多いんですよ。徳島には海野十三って

うのがいるし、愛媛の方には押川春浪というのがいます。マンガ家も有名な人たちがあちこちいて高知なんかマンガ家だらけであります。こういうようなエンターテイメントに宮武外骨の精神が生きているのかもしれませんが。人々をハラハラ面白くさせようというようなことに変な興味を持つ人物がいてその中の一人が押川春浪というSFの開祖という人物がおりました。そしてその弟が押川清という人物でした。この兄弟大の野球好きでありました。どうして彼ら2人が野球好きになったのか理由はよく分かりません。しかし大変野球好きになってお父さんがアメリカに布教の勉強で行っていた時に本を読んで、野球一つものがあってこれは是非やりたいと思った。海外にいるお父さん。このお父さんをお願いをしました。「野球のボールとバット買って来て。」当時全くどこにもありませんから。それでお父さんが「分かったよ。じゃあ買ってきてやるよ」って買ってきたボールで野球を始めたのがこの兄弟でした。そして日本の最初のプロ野球を創ったのがこの押川兄弟です。特に弟の押川清というのが創りました。日本運動協会というプロ野球球団を最初に創った人物であります。

でもお父さんが買ってきたボールで彼らが最初にやったキャッチボール。野球の練習というのは今から考えてみると途方もないことであります。よく練習できたなど誰もが思うことでしょう。なぜならお父さんってベースボールを全く知りませんでしたから、教育一本の聖書のことは詳しいけど野球の、スポーツのことは全く詳しくない人物でありましたのでアメリカで何かボールを買ってこいというので買って来たボールがサッカーボールでありました。

一方受け取った息子の兄弟も野球のボールって見たことがないので絵で見ると何かちっちゃそうなんですけど実物はこんなでかいのかと、あれでやってたっていうんですね。これは凄いですよ。

こういう人物が、兄弟がプロ野球を創りました。日本運動協会。聞いたことないでしょ。でもこれ大正の関東大震災が起こる1年前に成立したプロ野球

でありました。他に相手がないんです。どこも。

もう一つ出来たプロ野球球団が松旭齋天勝球団っていうのができました。女性で人気のあった手品師ですね天勝さん。天勝さんも野球が大好きで自分でチームを創りました。でも遊びで創ったんじゃないんです。当時大学野球がとても流行っていました。特に慶応大学のスタープレーヤー、皆雇いました。一方、押川清の方は早稲田の野球部の主将だったんで早稲田系がそこにドドッと入った。まさに早慶戦のプロ野球版のようなものをそこで展開される形になりました。元々、押川さんが最初にやった通り野球ってアマ野球だったんです。特に大学野球だったんですね。でもアマチュアの野球をやっている人気が出て大変な収入源になるのでプロが目をつけるようになって興行のために、客寄せのために野球をやらせるようになりました。お金バンバン、選手に、特に高校生とかそういうのにお金を払ったら学校の風紀が一気に崩れました。それで新渡戸稲造っていうお札になっていた教育者が、当時旧制一高ですね東大の旧制一高の校長が野球って害毒がある。日本では即刻やめる。特に青少年にはやらせるなという野球禁止の論陣を張りました。

よく考えると野球って盗塁があったり、見逃しがあったり、それから敬遠があったり、これ戦に置き換えますと卑怯な手ばかりなんです。デッドボールとかって相手にぶつけちゃうとかいう。どれを取っても若者たちの心の育成にはならん。むしろ悪い奴を育てるようなスポーツなんであるっていうんで。その証拠に現実に高校生や大学生がお金に釣られてあちこちの企業の猿回しや舞台のスタッフの一人としてゲストとして使われるようになっているのはこれは良くない。そういう大きなキャンペーンが張られました。やったのは朝日新聞です。その割には高校野球の主催やってるんです。朝日新聞がさんざんやりました。

そして、それに対抗するように確かにそういう面があるからプロ野球っていうのはクリアなものにしようというのでとても厳格なプロ野球球団が成立を

しました。これが日本運動協会。皆紳士なんです。ちゃんとパリっと着て。足袋やなんかもしっかり履いて。服装がまず乱れちゃいけない。お酒飲んじゃいけない。もうこれこそ大学のクラブ活動と同じような厳格な、大学野球よりももっと厳しいプロ野球ができました。

そしてさっきの天勝一座とゲームを行ったために大変人気が出たんですけど運が悪いんですね。ご承知の通り関東大震災が第一戦か、二戦、三戦くらいまでやったのか、とにかくやっとプロ野球を始めたとたんに関東大震災になりました。日本最初のプロ野球っていうのは潰れてしまったのですが、これを創ったのは実は押川兄弟なんです。このグループ特にお兄さんと弟が日本で野球をバックアップし普及させた人物でありました。

特に野球害毒論が出ていた時にはこの二人ですら野球はそんなもんじゃないというのを対抗してやったのは、それで高校野球は助かったんですね。昔の中等野球は。小学校も野球大会があったんですけどそれは潰れました。教育上良くないというので。高校野球だけは助かりました。そんなことはないという彼らの論陣のお陰でしょう。でもその代わり今でもそうですが、今も日本運動協会と同じでジェントルマンのスポーツでないと駄目だというので、変だと思いませんか、必ず頭を坊主にさせられる。高校野球は。私も中学の時野球部に入りましたよ。そしたらまずいきなり坊主になれと言われました。何かもの凄い抵抗があつて上から坊主にさせられ出家するじゃあるまいしと思ったんですね。あれは子どもの頃から何であんなことをしなければいけないのかっていうのは深く疑問であつたんですがベースはそれにあつたんです。

高校野球やってもいい。その代わりちょっとでも不祥事が起きたら即止めさせるぞ。とにかく旧制一高ですよ旧制一高っていう当時の中学の中では最高のこの校長が駄目だと言い、学習院の乃木校長がこれもアカンと言い。いずれにしても教育としては全く認められないというスポーツだったのが何とか中

等野球、今でも生き延びて今では大流行でありますよね。なったのは取引条件とった、出したからですね。私たちはいい子になります。悪いことしません。ていうような高校生であるというポーズを取らなきゃいけないその一つであつたという理由はおそらくここにあると思います。

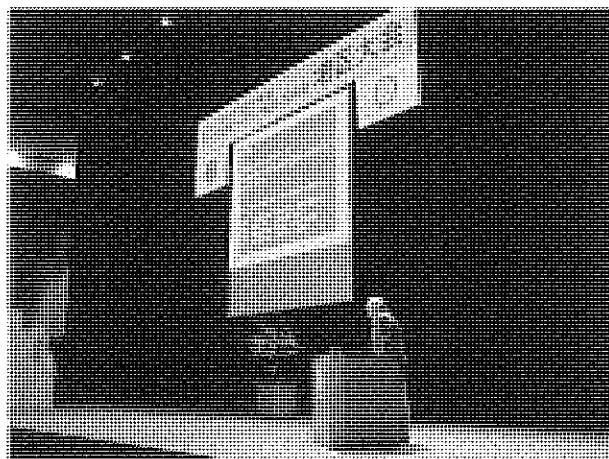
いずれにしてもそういうのを守つたのは何と出てくるんですここに。押川兄弟。この3人面白いですよ。お父さんは宗教家でありまして、お兄さんは冒険小説家で野球好き、弟は早大の野球部の部長でありプロ野球を創った人。最終的には巨人に繋がるものも創りました。後楽園ができた時に職業集団の後楽園イーグルスというのを創つたのも押川清でありました。だから日本のプロ野球の源は愛媛で創られたとも言えるでしょう。

もっと言えることがあります。それが最後になりますけれども正岡子規であります。正岡子規の話をちょっとやります。

次を見せて下さい。

これ左の方は正岡子規が野球のユニホームを着て、ユニホームですけど。ボールとバットを持っています。さすがに押川兄弟がサッカーボールでやったっていうのとは違いちゃんとしたボール。でも多分東大の野球部だからちゃんとしたボールじゃないかと思うんですが、バットなんか見てるとそこそこの様になっていると思うんですね。

右の上の方は押川春浪が、お兄さんの方が創つた



アマチュア野球クラブ、天狗クラブ。当時の有名な文士や俳優たちが沢山選手として参加しました。アマチュアのグループになります。まさにこれがこういう形で押川春浪が松山の関係者でありプロを創ったのに愛媛の力っていうのは大変大きかった。

一方学生野球についてもこの正岡子規が大変大きな足跡と影響を与えたっていうのを最後にちょっとお話をしておきます。彼は野球について非常に関心を持ったのは、元々スポーツマンだったんですよ。どうも病気で寝ているイメージが強いんですけども、その病気になる前は大変活発で色々な所に旅をする、スポーツも得意だった少年だったらしいんですね。その証拠に『柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺』なんて有名な句がありますけれども、あれも法隆寺まで行ってるわけですから。家で寝てるわけではなく沢山の旅をした旅の一つの徒然で書いたもので旅行者。俳人ですからやっぱり松尾芭蕉のようにあちこち動かなければ奥の細道みたいに忍者のように歩かなきゃいけないっていうのはやっぱりベースにあるんです。達者な人だった。

彼が一番東大の予備門に入って好んだのはこの当時の新しいベースボールでありました。文学者ですから野球についての句も沢山作りました。でもベースボールとかいうのを俳句に入れるのは、なかなか何となくかたくなくて嫌だっていうんで彼はやっぱり文学者ですよ。何とかこれを日本に定着できるように日本語にしたいというので考えました。そして彼は自分の名前に野球とつけました。今の野球と同じです。ただし読み方が違って野球「や」って読まずに「の」って読むんですよ。それから球の方は「きゅう」と読まずに「ボール」と読むんです。「のボール」という。そうなんです彼は本名のぼるって言ってたんです。自分の名前に「のボール」というのを付けたんです。今色々な野球の元祖の研究があって野球という言葉を作ったのは誰かっていう問題があって、今は一高の正岡子規の後輩であった中馬さんていうのはある日考えていてフィールドで球を追っかけるスポーツだから、フィールド「野」球

を追っかけるボール、じゃあこれ「球」だっていうんで「野球」っていうように思いついたっていうふうに言われています。たしか3年くらい後輩なんですよね。あの正岡子規と。

でも正岡子規は自分の名前の「のボール」。つまり野球っていうのをもっと前に考えついでいましたし、2人とも同じ旧制一高で同じ野球部ですから、ベースボール部ですから何か連絡があったんじゃないかとも思えるんですが、野球という名前はそのベースボールに対しての訳語としてはもしかしたら正岡子規じゃないかもしれませんけども、その代わり投球だとかランナー、走者だとか送球だとか打者とか捕手とかってというような今でも使っている日本語は実は正岡子規がつけました。

それだけではありません。彼は本当に好きで本人が言ってるんですから半分冗談だとは思いますがでも野球をやり過ぎて病気になったって言うくらい野球をやってたんですね。それでですから時々松山に戻ってきた時に、松山中学出身ですから松山中学の学生たちに帰ってきては野球っていうのがあるからやろうよ、野球とは言っていない、ベースボールあるからやってみよう。ってさかんに帰郷しちゃあ松山中学の後輩たちに半分無理矢理でしょうけどやっていたのが、中には興味を持つ人たちがいたんですね。7つか8つくらい下に河東碧梧桐という人物がいて。この人物が手ほどきを受け野球をやるようになりました。そしてその下に、さらに3つくらい下で子規の野球に感化されて野球大好きになったのは後に有名になる高浜虚子。皆松山中学校の後輩たちなんですね。

この流れって学生野球の正岡子規に影響を受けた野球大好きな日本人の系譜なんだけども同時にすぐ思い出すことがあります。近代日本の俳句の流れでもあるんですね。碧梧桐という有名な俳諧で特に高浜虚子なんていうのはホトトギスっていう有名な俳句の雑誌を作った、編集した人物であります。

つまり野球を介して正岡子規から影響を受けて出来上がったのが新しい近代の『柿食えば鐘が鳴るな

り法隆寺』式の俳句の流れの一つのきっかけになってるっていうのはこれなかなか凄いことであります。しかも松山中学に先生となって嫌々来たのが夏目漱石でありました。正岡子規の大学のお友達であります。正岡子規が帰郷した時、特に病気になって帰ってきた時に静養した静養先は夏目漱石の下宿の中だったとも言われてますから、やはり相当松山の方でも綿密な関係があったんでしょう。そして何よりもこのグループで作ったのはホトトギスっていう雑誌でありました。ホトトギスって正岡子規のことなんです。子規ってホトトギスのことですから。

四国の人ですから多分常識としてご存知だろうと思いますけども、これも正岡子規らしい。病人で暗いイメージがあるかと思ったら正岡子規ってお茶目でスポーツマンでとても皆と仲良く遊んだ人物の一人であったと。イメージを一新することがここにもあると思います。これホトトギスって昔から鳴いて血を吐くホトトギスっていう言い方があると思います。何かピーピー鳴きながら血を吐くっていうので本当ではないと思うんですが言い伝えとしてあるんですね。それを子規は使っているわけですよ。私も大咯血をしますから病気で。ホトトギスと同じだっというのでホトトギス。

普通付けませんよ。自分の病気に関係あることを自分の号としては。でも付けたんですね。この辺も宮武外骨が本名にしちゃったのと同じで。不思議なこのユーモアのセンスっていうか、面白いところがありますけれども。子規の句が面白いのはやっぱりそういう四国的なエンターテイメントがあるせいじゃないかと思うんですね。文学であり写実主義であり自然の文学であるってことは勿論ですけども、やっぱり面白いんですよ。

その芭蕉もそうだったんです。芭蕉もギャグまでは言いませんけども江戸時代の人には芭蕉をもって変で面白いねっていうので皆関心持ったんですね。「古池や蛙飛び込む水の音」もその通り、今聞くと何んのこっちゃと思うんですがあの当時の人々に

とっては一種の新しさがある。おそらくあったんだと思います。そういう新しさがあったんでおそらくホトトギスっていう名前が作られたんですけど。これ彼が自分の本名を野ボールと言ったのと同じようにこれらの用語の使い方っていうのは今野球の、プロ野球も含めて実際に使われている一つの大きな要素はこの辺にあるんじゃないかと思います。

ちなみにこのホトトギス、野球の話も、時々、句も載ってた通りおそらく野球普及の一つの役割にはなったと思います。もっと言うと近代の文学をついでに創っちゃって、あえて言います。ついでに創ったかもしれません。

なぜなら今言いましたように夏目漱石が『坊っちゃん』をそしてデビュー作の『吾輩は猫である』を連載したのがホトトギスであります。ホトトギスが無かったら多分、坊っちゃんもできなかったですし、ましてや『吾輩は猫である』もできなかった。正岡子規ももっと野球に打ち込んでいたんじゃないかと思いますけども。こういう不思議な面白い人物がいたんですね。野球、プロ野球も創っちゃったんですこのグループっていうのが。

これを考えますとなかなかこの四国色々な面で、塩、醤油、鯨節もさることながら文化の面でも反骨雑誌をつくった人物や、とんでも本をつくった人物や日本の文学を作っちゃった人物がちゃんとここに存在をしていた。なかなかこれだけ狭い地域でこれだけカッコリと近代の形をつくった藩っていうのはないんじゃないでしょうか。

それに先ほど言いましたように古代以来伝々と続いた自然の力っていうのはここにセットになっている。4県それぞれの特徴があるんでしょうけどもやっぱり大きくかためてみると皆共通する何か頼もしさを私は感じて、だから四国は時々来て色々な取材をしているんだと思います。

奇人大好きな人間からの報告でございました。

ご静聴有難うございました。